

開 会 あ い さ つ

放送教育開発センター所長 加 藤 秀 俊

進行（放送教育開発センター教授 永岡慶三） おはようございます。定刻でございますので、放送教育開発センター研究シンポジウム・1994、『大学改革とメディア』を開始させていただきます。私、実行に携わっております、放送教育開発センターの永岡と申します。昨日のオープンハウスに引続きまして、本日シンポジウムを行います。昨日は参加者132名を数えて成功のうちにオープンハウスを終えることができました。御礼申し上げます。本日のシンポジウムのまず最初の挨拶と致しまして、放送教育開発センター所長、加藤秀俊よりご挨拶申し上げます。

加藤秀俊 ご紹介いただきました加藤です。北海道から九州まで、全国の大学からこれだけ沢山のお客様をお迎え致しまして、大変嬉しいことだと思っております。のっけからとんちんかんの話のように聞こえるかも知れませんが、堀一郎先生という東北大の先生がいらっしゃいました。私どもの世代の人間が読んだ本の中に、堀先生の「遊行女婦の研究」というのがあります。遊行というのは遊び行く女、でありまして、ご専門の方はすでにご存じかと思いますが、遊行女婦と申しますのは中世の熊野信仰などから派生しているもので、だいたい真言密教の布教者です。その真言密教を全国に広めるために、この女性たちが絵巻物を持ちまして、そこに仏さまの有り難いお話とか地獄極楽の絵図などが書いてあります。それを路上に広げて雉の羽で指差しながら、仏教を広めたといわれています。このことは堀先生の研究だけではなくて、柳田国男先生の『女性と民間信仰』という書物にも書かれております。このような布教は一般に「絵解き」というふうに呼んでいました。

なぜこんな事を申し上げるかといいますと、私はどうやら教育というもののそもそもの淵源を辿っていくと、どうしても宗教というものに結び付いてくるのではないだろうか、ということを申し上げたいからなんです。これについては教育史の専門の先生方、いろいろご異論あるかもしれませんが、そもそも何が最初に教えられたかという、これは西洋東洋を問わずだいたい宗教でございます。宗教というのはどうやってその教えを広めていくかについて、ずいぶん工夫をしました。例えばの話であります、ヨーロッパに行きますと、ケルンの大聖堂というのがあります。あれはレオナルドダビンチも見ました。ゲーテも見ました。いずれもこれは建設途上でございます。去年、私はケルンで大聖堂に行きましたけれども、まだ建設中なんですね。5世紀に渡って作り続けているあの大教会というのを見ると、これは大変なものだと思います。中に入ってみますと、内部空間もまた凄いものです。バチカン宮殿の中には、ミケランジェロの描いた密画が天井まで描かれています。日本では東照宮の建物なんかをちょっと見ますと、これも絢爛豪華たるものですね。つまり教会では寺社などの、宗教施設というのは私に言わせれば、マルチメディアの極限でございまして、極彩色、そして荘厳な鐘の音も聞こえてくるという、そういう環境の中で神様仏様からの言葉を聞くと、そういう訳ですね。ほうほうに私、書きましたけれども、今メディアということばは一種の流行語になっていますけ

れども、メディアというのは複数形でございまして、申し上げるまでもなく、単数形はミディアムでございます。ミディアムというのは辞書を引けばわかるように、媒介物という訳語と同時に霊媒という意味もございますね。つまり亡くなった方の魂をこの世に呼び寄せてくるのが、ミディアムなのです。聖と俗を繋ぐもの、これがミディアムであって、これが複数形になってメディアになったということになっているわけですから、ひょっとすると、というより、大方のところ私の考えでは、宗教施設というのが学校、或いは教育施設というものの原形だったのではないだろうか。実際古代から中世を考えてみますと、これも東西を問わずであります、教えられることはキリスト教の教義であり、仏教の教義であり、神道の伝達場所でもありました。そこにはお巫女さんによって代表されるような霊媒が必ずいた。日本の小中学校で、教師聖職説論争がございまして、教師は聖職者である、いやそうじゃない労働者だ、というような議論は、今でも続いているようございまして。教師が聖職であるというのはやはり有り難いことを教えてくださるから先生なんでありましてね。大学でも教壇というのは、ちょっと一段高いところにある。一段高いところに立つというのはこれは大変象徴的でありまして、より天に近いということです。昔、紛争以前のイランに行きました時に、イランのモスクに入りましたら、イスラムの教壇というのはずっと高いところにあるんですね。だからそこに来る民衆はずっと仰ぎ見ながら有り難いお話を聞く。今の日本の教壇というのはせいぜい30センチほどですから、たいした高さではありませんが、その上がるという行為自体をみると実は先生もまた一つの霊媒の名残りなのかもしれない。

そんなことはちょっと見当違いのように聞こえるかも知れませんが、以上のようなことを考えてみますと、どうやら教育の歴史というのはメディアの歴史だったような気がするんです。ハードの方で申しますと、今申し上げましたように寺院建築によって代表されるように、荘厳な施設がなければならない。経済学者のシュンペーターは、「大学は建物ではない」という明言を残していましたが、今でもほうぼうの大学を拝見に行きますと、やはり学校施設というのはとても大事なことなんですね。そしてちょうど教会がかつてのヨーロッパの村落社会に鐘を鳴らして時を告げたのと同じように、古い大学には時計台というのがございまして、これがまあ教会の塔の代わりのような役割をして、或いはそれを引き継いだものじゃないかと思えます。1970年の大学紛争の時、私、京大にいましたけれども、時計台が学生によって占拠されるというのは、非常に象徴的なことございまして、聖なる空間にそびえ建っていくこの塔が占拠されるということは、大学を否定し、破壊するという象徴的行為だったのではないだろうか。今時計台のある大学というのはかなり少なくなりました。皆が腕時計を持つようになりましたから必要ではないんですけれども、早稲田の大隈講堂もそうですし、京大の時計台というのもそういう意味を持っていた。どうも大学の建築というのは教会建築と似たところがある。そういう接続性があるような気がしないでもないんです。更に今申し上げました装置の話でございまして、小さな装置としてもずいぶん教育者は工夫を凝らしてきました。装置の方で言いますと、もう我々お馴染みの黒板なんていうのもですね、これは学校教育の中で初めて開発されたものでしょう。そして黒板とチョークというのも一つのメディアであります。それからよりソフトの方に参りますと、日本では「いろは唄」というのがございましてね。いろは四八文字をずっと暗記できるように、四八文字のいろは唄を開発したり、九九という掛け算

の遊び言葉であると同時に教育的な言葉を作ったのもまた教育者でした。算盤というのもこれは最近ではもともとご商売用でございますけれども、算盤というようなものも大事な教育メディアであったと思います。それがここ二世紀程ずっとそのまま続いているわけですが、ここに来まして、新しいメディアがぞくぞくと登場して参りました。昨日、今日と2日に渡ってメディア研究をしていただいてまして、我々の施設も見ていただいているわけですが、初等中等教育に関しましては、新しいメディアをどういうふうに教科目の中に取り入れていくのか、という文部省のご指導もありまして、情報処理教育、などは小学校段階から始まっています。

しかし大学を含めた高等教育、とりわけ大学の場合には、文部省からこういうカリキュラムを作れとか、この学年度にコンピュータをここまで学習させろとか、そういったご指導は全くありません。これは大学の自治というものですから、それぞれが自治自由の中でやっていらっしゃる。その結果と致しまして、日本全国ほうぼうの大学を拝見しますと、視聴覚室を初めとする、様々な施設設備が完備している大学、これは凄いなと思う大学もある一方、全くメディアを使うというようなことに関心のない大学。個々の先生方につきましても、大いに様々な新しいマルチメディアなんかを使おうという先生がいらっしゃる反面、俺は紙と鉛筆さえあればいいんだ、という方もいらっしゃる。したがって高等教育というのはメディア利用にばらつきがある場面でございます。そんなことで私どもとしましては、できるだけメディアを大学教育の中で有効に使っていただきたい。そのお手伝いもしたいし、同時に共同研究も、勉強もさせていただきたい。これが私どもセンターの目標として掲げているところでございます。そこで、もう一つ付け加えておきますと、マルチメディアと言いますと双方向性とかなんとか言われていますけれども、今マルチメディアというのはすでに目の前にあるんです。今はCD-ROMといったことばを耳にいたしますと、大変新しいもののように聞こえますけれども、実は任天堂セガという娯楽機メーカーは、完全に双方向性のマルチメディアを開発して、これを通常のテレビに繋げました。つまり、かつて聖なるものと俗なるものを繋ぐ役割をしていたメディアは、教育の世界から離れて娯楽の世界で今花開いているわけです。これは教育、学習の世界が多少このメディアの進展に対して、多少どころか大いに無関心、ないしは無感覚であったということと関係しているのかも知れません。

いろいろ申し上げたいことがあるんですけれども、そうした変革期の大学の中で、メディアを実際に利用された実例、これからしようとされているご抱負、そうしたことを今日一日伺ってお互いに勉強をしようというわけでございます。それはまさしく変革期の大学、或いは大学改革のための一つの方途になろうかとも私自身思っております。昨日オープンハウスを御覧になった方は、このセンターの活動状況をすでにおわかりかと存じます。お陰様で昨年度は合計33の大学から施設利用のご希望がございまして、28大学が我々の施設をご利用していただいたり、共同研究に参加していただいております。7年度の公募のポスターも、もう出来上がりました。各大学に、配布されているはずでございます。先生方、職員の方もたくさんおみえでございますので、こういう所に使えるのか、といった時には、どうぞこのセンターの施設、設備をご利用くださいますようお願い申し上げます。どうぞ有意義な会をすすめてくださいますよう。

進行 それではさっそくでございますけれども第一セッション「メディアを大学教育に用いる」を始めたいと思います。では座長の方に進行はよろしく申し上げます。